

新・下野市風土記

こやまじょう

児山城出土のなぞ？ の土器？



下野市教育委員会 文化財課

今から20年以前、南河内町・石橋町・国分寺町の3町は町史編さん事業として、考古資料、古文書などの文献資料、米・麦などの農業生産や農具、結城紬や煙草などの生産に関わる道具や資料の調査、住民の皆さんへの聞き取り調査などの民俗資料調査、寺社・民家などの建造物や石造物調査を行いました。これらの調査成果に地勢や地理的要因、自然環境などに関する分野も加筆され、それぞれの町の「町史」が編さんされました。今回は、石橋町史通史編に記されている児山城について記します。

栃木県内の城館

これら各町の町史編さん事業が実施される以前、昭和50年に栃木県教育委員会が作成した「栃木県遺跡地図」には270余の中世城館跡が示されており、その後、昭和57年に全県下で調査が行われ、県内410か所の城館跡が『栃木県の中世城館』としてまとめられました。この資料には旧石橋町域に児山城、大光寺城、館の内館、旧南河内町域に薬師寺城、坪山城、旧国分寺町域に箕輪城、古館(上古館・古館・下古館)の計7遺跡が掲載されています。

文化財課では、平成28年度から令和2年度の5か年間に発掘調査を実施した栃木県指定史跡児山城跡の発掘調査報告書を現在作成しています。城跡のレーザー測定の結果、堀と土塁に囲まれた主郭は、南北約90m、東西約80mと若干南北に長く、主郭を構成する東側の堀の上幅が約20m、底幅が約11m、堀底から土塁の頂部までの高さが約7mであることが判明しました。主郭の東側には堀に沿って南北に長い第二郭があり、その郭の東端には2時期にわたり土塁が作られ、2期目の土塁は1期目のものを一回り大きく作り替えていることもわかりました。また、いずれかの時点で土塁の一部が人為的に破壊され、堀底に大きく崩落していることも確認できました。これはもしかすると、家康の立案で慶長20(1615)年6月13日に江戸幕府が発布した「一国一城令」によって破却されたのかもしれませんが、あるいは、それ以前に落城し破壊されたのかもしれませんが、その時期を知る手がかりとして、調査で出土した遺物が重要となります。

出土資料から

調査により、約70点のカワラケ(素焼きの盃のような形の皿。焼成温度が800度程度。作り方には手びねりとロクロを使用するものがある)や素焼きの香炉や火鉢、常滑焼の甕などの破片が出土しました。県内のこれまでの調査で、宇都宮氏・小山氏・足利氏などそれぞれの豪族が支配した領域から出土したカワラケについて詳細な分析が行われています。考古学の分析方法は、大きさや形(プロポーション)が作られた時期により変化することを見分ける手法が用いられます。児山城から出土したカワラケは口縁部の直径(口径)と器の高さ(底から口までの器高)により大・中・小の3種類があり、容量は大が90~100mL、中が80~90mL、小が10mLで、小は盃としては小さいことから、塩や味噌などを盛ったものと想定されます。『徒然草』には、第五代執権北条時頼(最明寺入道)の屋敷で味噌を肴に酒を飲むシーンがあります。

今回出土した約70点のカワラケの中に、焼かれた後の器の底に直径8mm程度の穴が開けられたもの(写真)が2点確認されました。

これらは、少数ですが上三川城や各地の城館などでも出土しています。使い方をイメージすると、鹿児島県で焼酎を飲む際に遊びで用いられる「そらきゅう」という盃(注がれた酒がこぼれないよう、底に空いた穴を指でふさぎながら飲み干す)のような使い方をしたのかもしれませんが。死と隣り合わせの合戦に出陣する前に、盃を交わしたのかもしれませんがね。



穴が開けられた土器